

漁海況年報

平成28年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場
(電話 0558-22-0835)

【黒潮流路】

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成28年1～12月の各月前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

平成28年の黒潮流路は、1月前半はC型であったが、その後、小蛇行が複数東進したことで小規模なD型、B型、N型を繰り返し4月後半にC型となった。7月前半まではC型で推移したが、7月後半のW状B型とD型が同時に存在する状態)を経過して8月前半にはN型となった。その後小蛇行の東進に伴い9月前半にB型、9月後半にはC型となった。10月前半まではC型であったが、10月後半から小蛇行が複数東進したことで小規模なB型、C型を繰り返した。

小蛇行により流路が変化した3月前半～4月後半及び7月後半～9月前半には伊豆諸島北部海域から駿河湾、相模湾への暖水波及び複数回みられた。また、11月前半には房総沖から遠州灘に向かう内側反流がみられた。

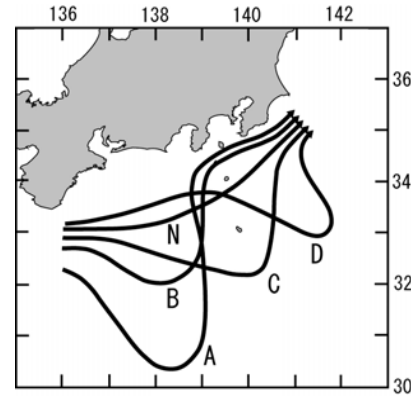


図1 黒潮流型の区分
(海上保安庁海洋情報部より)

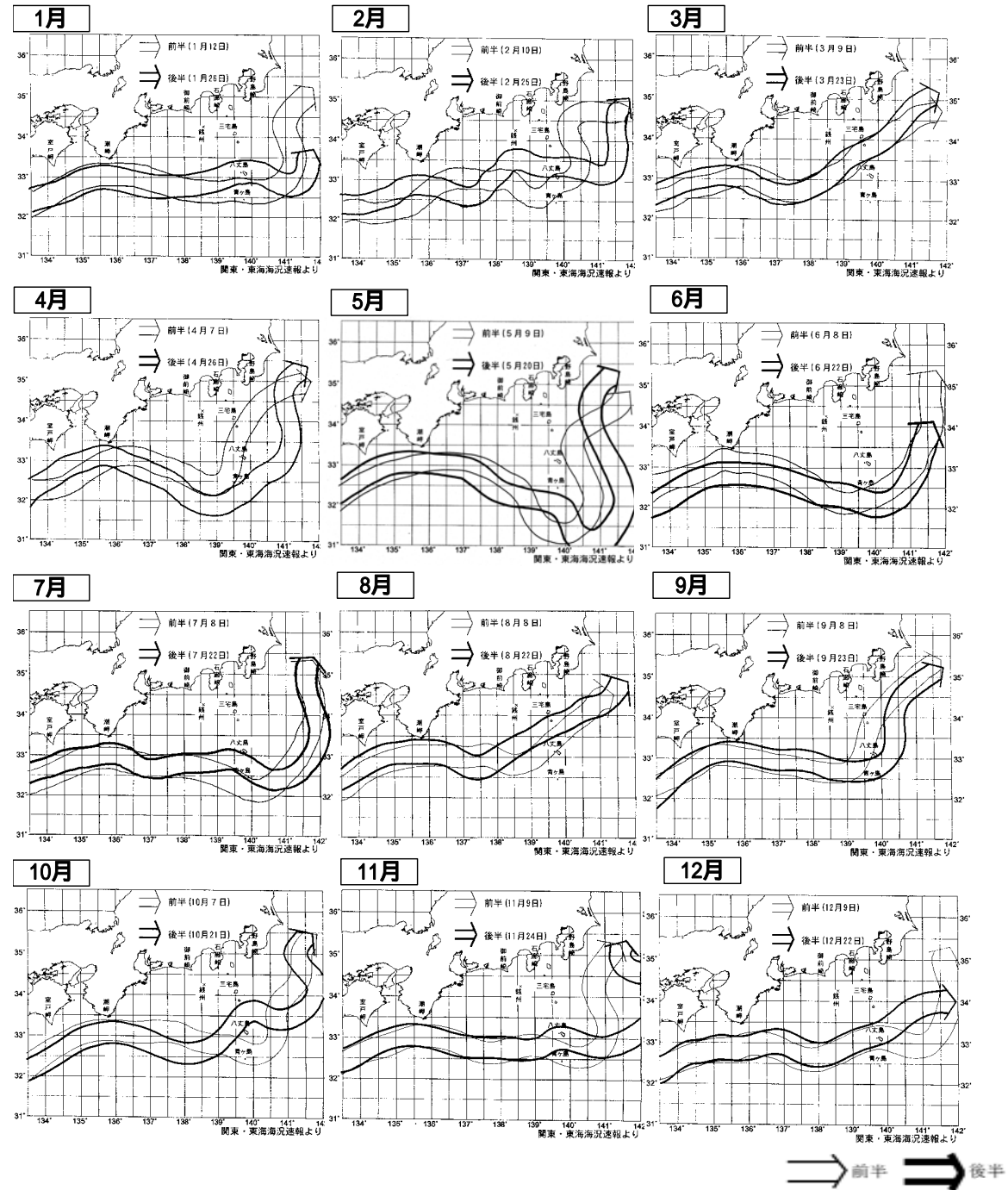


図2 黒潮流軸の変動(関東・東海海況速報より)

表1 黒潮流型一覧表 資料:海洋速報(海上保安庁) 関東・東海海況速報)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月															
13年	C	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C	C	C	WB	BC	C	C	CD	DW	WD	DN	C				
14年	N	N	N	N	N	N	N	N	NB	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N			
15年	N	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N			
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A			
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C	C	C	C	C	C	D	DN	N	N	N			
18年	N	N	N	NB	C	CWC	CN	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	BN	C	NC	C	D	DN	N	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	C	N	N	B	C	C	C	C	C	W	N	C	C	C	D		
20年	C	C	N	N	N	N	N	B	B	C	C	C	C	CD	C	C	C	CD	C	C	C	C	C	C	C		
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C	C	C	CW	WC	C	C	CN	NB	BN	BC	C	C			
22年	D	DN	N	BC	N	NW	WB	C	CD	D	N	N	NB	B	BN	N	N	N	N	N	N	BC	N	BC	CN		
23年	N	N	N	B	B	CW	C	DW	N	BC	C	D	N	NB	NB	BN	N	B	C	DN	N	N	N	N			
24年	N	N	N	B	C	C	CD	N	B	C	C	D	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	BC	C	C		
25年	C	ND	D	DN	N	N	N	NB	B	BC	C	C	C	W	W	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C		
26年	C	C	C	C	C	WB	C	BC	N	N	BC	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N		
27年	N	BC	C	W	WB	C	C	C	C	CD	DC	D	N	NW	W	WC	C	C	C	C	C	N	N	NB	BC		
28年	C	D	BN	DW	NB	NB	BC	C	C	C	C	C	C	CW	BN	N	B	BC	C	CWB	CW	WC	CW	CB			

* 静岡県水産技術研究所一部改変

[県下沿岸域]

図3に平成28年1~12月の旬別の沿岸水温の変化を示した。1月は全域で「平年並」~「高め」であった。2月上旬は、全域で「平年並」となったが、2月中旬~7月上旬は相模湾側で「やや高め」~「高め」、駿河湾側で「平年並」~「やや高め」であった。7月中旬は相模湾側で「平年並」となったが、7月下旬以降は「やや高め」~「極めて高め」で推移した。一方、7月中旬以降の駿河湾側は平年に比べ水温が高い傾向はあるものの「平年並」~「やや高め」で推移した。

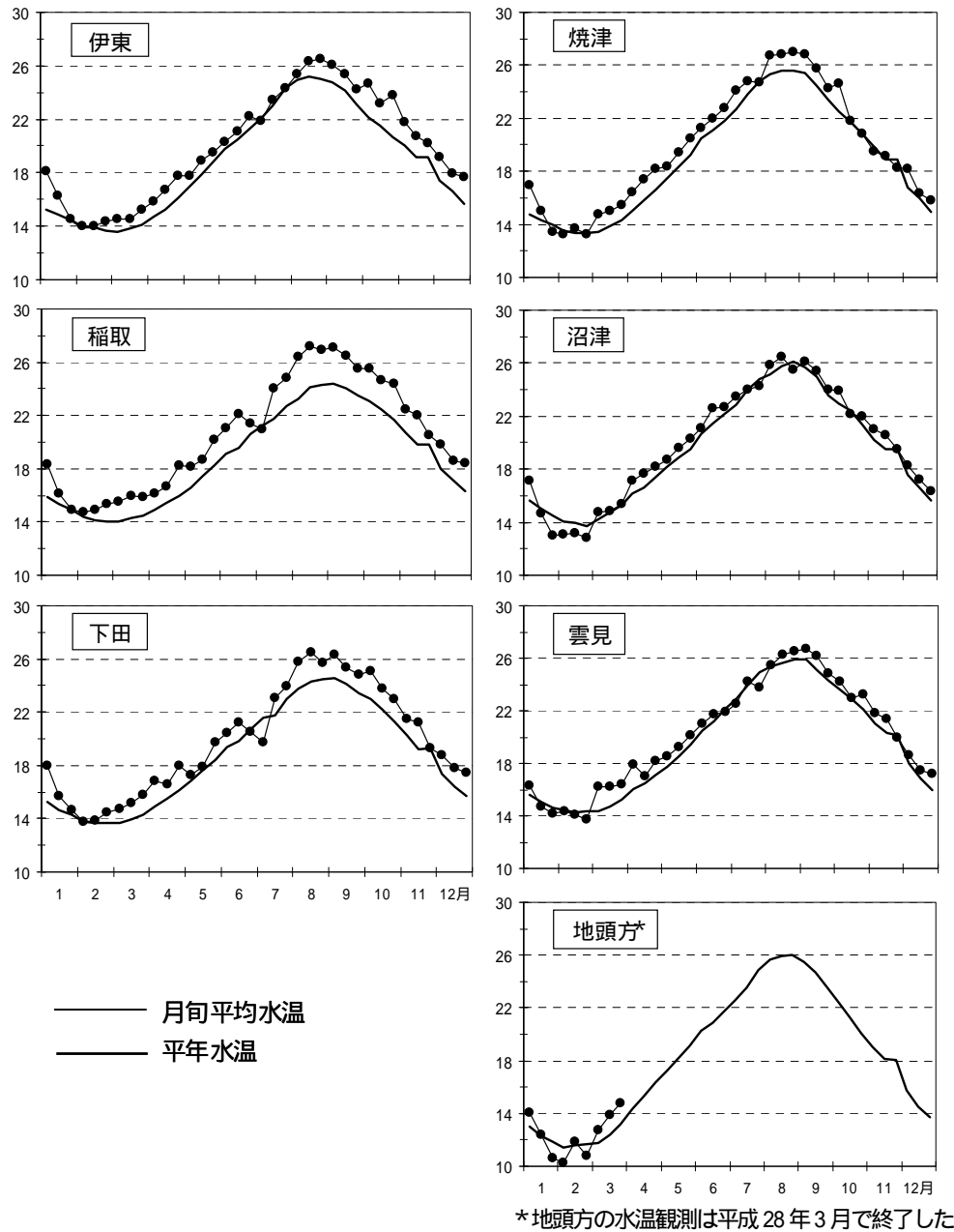


図3 平成28年1~12月の旬別沿岸水温の変化(縦軸は水温、横軸は月を示す)

[サバたもすくい棒受網]

1 たもすくい(平成28年1~6月)

たもすくいの操業は、1月6日に三本でゴマサバを対象として始まった。マサバ主体の操業は1月28日に三本で始まり(1夜1人当たりの水揚量:2,278kg、水温:18.7)今漁期のマサバ初漁日となった。以降、2月下旬まで三本に漁場が形成されたが、3月になると銭洲に継続した漁場形成があった。銭洲海域に安定した漁場が形成されたのは昭和53年漁期以来38年ぶりのことであった。4月も引き続き銭洲に漁場が形成されたが、継続した暖水波及により、水温は19~20台まで昇温した。そのため、中旬以降漁況は低調となり、月末にはマサバ主体の操業は終漁となった。5月以降、マサバ漁場は形成されなくなり、三宅島周辺海域でのゴマサバ主体とした操業にわずかに混じる程度となり、今漁期のたもすくい操業は5月中旬で終漁となった。

漁期を通じたマサバCPUE(1夜1隻)は12.8トンで、比較に当たっては漁船規模、操業隻数の違いを考慮する必要があるが、豊漁だった1977~1981年漁期の平均に準ずる高い水準であった。平成28年1~6月の主要7港*1への総水揚量は、マサバが4,053トンで前年(2,111トン)の1.9倍、ゴマサバが1,081トンで前年(400トン)の2.7倍であった。

*1 千葉県:千倉・富浦、神奈川県:三崎・長井、静岡県:伊東・沼津・小川の7港

2 棒受網(平成28年1~12月)

棒受網の操業は1月16日に始まった。漁場は、漁期を通して主に三宅や三本、銭洲に形成されたが、一時的に中の瀬やひょうたん瀬に形成されることもあった。なお、1月下旬から4月までは全船がたもすくいによりマサバ主体の操業を行った。

平成28年の静岡県主要4港*2における漁期を通じたゴマサバCPUE(1夜1隻)は20.3トンで、前年(21.4トン)、前々年(24.6トン)を下回った。今漁期の水揚量は、マサバは1.9トンで前年(246トン)を下回り、ゴマサバは4,877トンで前年(5,887トン)を下回った。マサバ、ゴマサバともに水揚量が前年を下回った理由としては、マサバ資源量増加による来遊量の増加に伴い、2~4月はすべてマサバ主体のたもすくい操業を行ったためと考えられる。

*2 伊東・静浦・沼津・小川の4港

3 小川魚市場におけるサバ類単価

平成28年の小川魚市場における棒受網(一部たもすくいも含む)のサバ類月別単価は、マサバが105~324円/kg(1~6月,12月)、ゴマサバが82~119円/kgであった(次頁:表2)。水揚の主体となったゴマサバは、年間を通じて80円/kgを上回る単価で推移した。この理由として、水揚量の減少や、カツオの水揚げが昨年に続き低調であり、カツオ節加工の代替品としての需要増加、輸出向け缶詰原料としての需要増加等が影響したと考えられる。

表2 小川港(焼津市)における棒受網・たもすくい の さば類月別単価

単位：円/kg

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成23年	マサバ	-	216	225	169	280	450	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	48	54	58	62	62	58	56	51	54	54	53	48
平成24年	マサバ	271	138	263	172	103	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	52	46	51	51	46	52	62	59	59	56	58	59
平成25年	マサバ	485	182	93	132	93	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	107	80	72	78	75	82	82	82	75	76	83	91
平成26年	マサバ	193	301	229	215	187	165	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	101	170	110	105	92	85	91	91	94	73	83	116
平成27年	マサバ	409	295	119	106	83	108	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	120	198	111	88	78	88	87	169	109	106	94	83
平成28年	マサバ	203	134	142	105	228	-	324	-	-	-	-	183
	ゴマサバ	92	114	119	101	98	92	87	82	82	84	92	93

2 漁況(漁場形成と魚体)

御前崎港での魚体測定及び漁場聞き取り調査から、漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1月 中旬から近海竿釣り船が中南方面に出漁し、例年より早い17日に初水揚げがあった。漁場は26~27° N、140~150° Eの西之島付近やさらに南方の17~18° N、136~140° E付近で、小(尾叉長45cmモード)及び大(同64cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 2月 19~27° N、139~142° Eの中南海域で、特大(同66cmモード)カツオを主体に極小(39cmモード)カツオを漁獲した。
- 3月 23~26° N、140~143° Eの中南海域で、特大(同67cmモード)・特々大(同73cmモード)カツオを主体に漁獲した。下旬から沿岸竿釣り船が伊豆諸島海域に出漁を始めたが、キメジ(キハダマグロの幼魚)主体の水揚げでカツオは僅かであった。
- 4月 上旬は、近海竿釣り船が22~25° N、146~149° Eの中南海域で、大(同65cmモード)・特々大(同73cmモード)カツオを中心に漁獲した。中~下旬は、沿岸竿釣り船が33~34° N、140E付近の伊豆諸島周辺で小~極小(同41cmモード)カツオを漁獲したが、水揚げの主体はキメジであった。
- 5月 上旬は低調な漁模様だったが、中旬以降、33~34° N、138~140° Eの伊豆諸島北部から遠州灘沖にかけて沿岸竿釣り船の操業が活発化し、極小~小小(同43cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 6月 近海竿釣り船は房総沖の漁場へ移動し、沿岸竿釣り船が33~34° N、138~140° Eの伊豆諸島北部から駿河湾沖や遠州灘沖などで、小(同44cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 7月 31~34° N、139~140° Eの青ヶ島を中心とした伊豆諸島周辺や駿河湾沖で、小(同45cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 8月 32~33° N、139~140° Eの青ヶ島や八丈島を中心とした伊豆諸島周辺で、小(同47cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 9月 32~34° N、139~140° Eの青ヶ島から三宅島や銭洲などの伊豆諸島北部で、小(同47cmモード)カツオを主体に漁獲したが、極小(同39mモード)の小型魚の割合が増加した。
- 10月 34~35° N、139~140° Eの大室出しを中心とした伊豆諸島北部の海域で、中(同51cmモード)カツオを主体に、極小(同42mモード)の小型魚を漁獲した。
- 11月 34~35° N、138~140° Eの大室出しや駿河湾内で、近海竿釣り船及び沿岸竿釣り船が中(同54cmモード)・小(同43cmモード)カツオを漁獲したが、水揚げの主体はマメジ(クロマグロの幼魚)であった。
- 12月 上旬に沿岸竿釣り船1隻が水揚げして今期の終漁となった。青ヶ島周辺で特小(尾叉長測定なし、体重1.3kg以下)カツオを漁獲した。

[サクラエビ船曳網]

春漁は4月3日夜~6月3日夜に操業が行われた。出漁日数は22日、漁獲量は810トンで、漁場は主に相良沖及び富士川沖に形成された(前年の出漁日数は17日、漁獲量は622トン)。漁獲されたサクラエビは前年(H27年)生まれのエビで平均体長は37.8mmであった。

秋漁は10月31日夜~12月20日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は17日、漁獲量は404トンで、漁場は主に焼津沖~相良沖に形成された(前年の出漁日数は14日、漁獲量は384トン)。漁獲されたサクラエビの平均体長は、当年(H28年)生まれのエビによる30.9mm(前年同期30.8mm)、前年(H27年)生まれのエビによる40.3mm(前年同期39.9mm)の2群で構成され、当年(H28年)生まれのエビが主体であった。

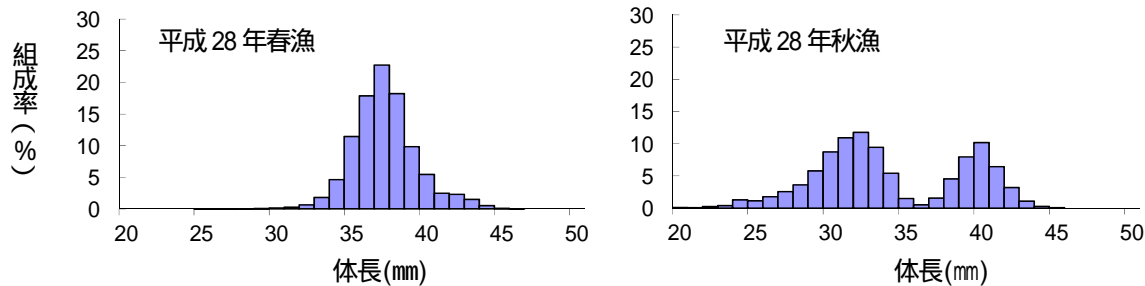


図4 平成28年春漁、秋漁で漁獲されたサクラエビの体長組成

[竿釣り近海カツオ]

1 水揚量と魚価

平成28年の静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は936トンで、前年の1,261トンを下回り、過去5か年平均(1,606トン)の58%であった。現行の統計(平成2年以降の集計)の中では最も少ない水揚量となった。

魚価は476円/kgで前年(359円/kg)及び過去5か年平均(389円/kg)を上回った。

表3 平成28年近海・沿岸竿釣り船のカツオ水揚量等(県内主要5港)

年月	水揚量 (トン)	水揚 隻数	水揚 / 隻 (トン)	平均 単価 (円/kg)	主漁場と魚体 ()内は体長モード、単位はcm
28年 1月	49	5	9.8	349	西之島付近(45)、中南海域(64)
2月	46	6	7.7	424	中南海域(39,66)
3月	87	7	12.4	261	中南海域(67,73)
4月	44	15	2.9	411	中南海域(65,73)・伊豆諸島周辺(41)
5月	231	68	3.4	507	伊豆諸島北部、遠州灘沖(43)
6月	150	59	2.5	439	伊豆諸島北部、駿河湾沖、遠州灘沖(44)
7月	75	24	3.1	368	青ヶ島等、駿河湾沖(45)
8月	58	23	3.3	600	青ヶ島、八丈島等(47)
9月	100	38	2.6	522	青ヶ島、三宅島、銭洲等(47)
10月	55	27	2.0	586	大室出し等(42,51)
11月	39	63	1.2	984	大室出し、駿河湾内(43,54)
12月	2	1	1.6	151	青ヶ島(尾叉長測定なし)
28年計	936	336	2.8	476	
27年計	1,261	224	5.6	359	
5カ年平均	1,606	328	4.6	389	平成23~27年の平均

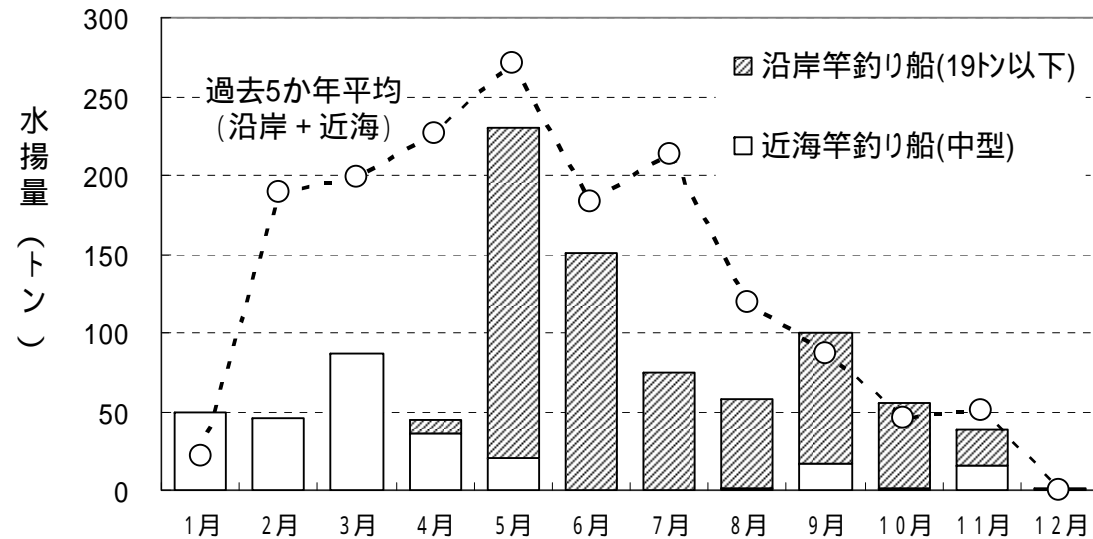


図5 近海・沿岸竿釣りカツオの月別水揚量の推移

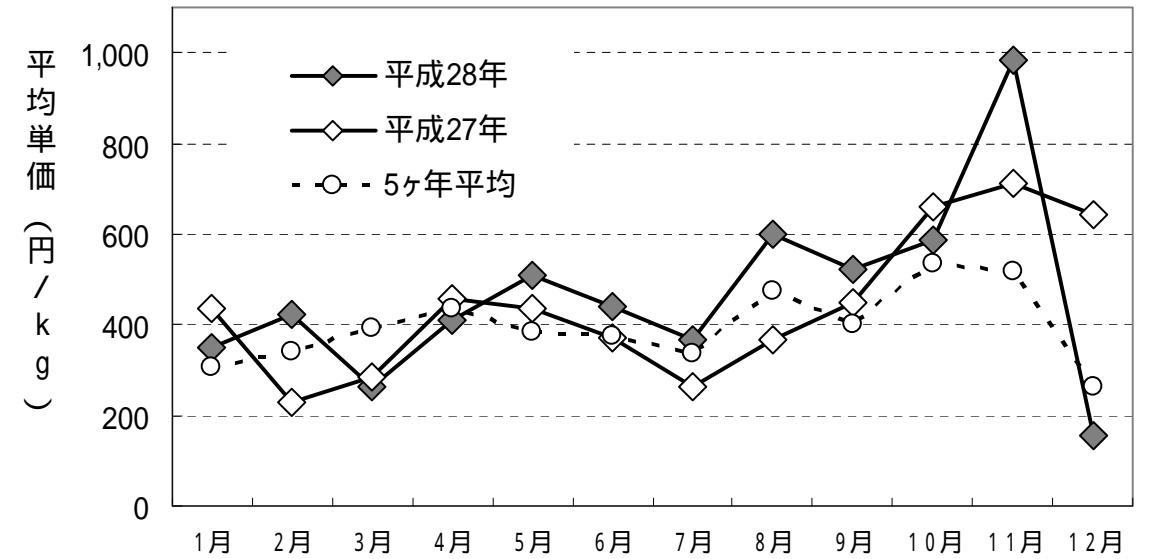


図6 近海・沿岸竿釣りカツオの平均単価の推移

[まき網(いわし類)]

1 マイワシ

平成28年における静浦漁港の総水揚量は1.8トンであった(前年0.3トン、^{*}1.2トン)。沼津港の総水揚量は、3,453.2トンで、前年(1,832.1トン)の1.9倍、^{*}2,071.7トンの1.7倍であった。月別では1月(1874.3トン)にまとまった水揚げがあった。小川港の総水揚量は、1,049.3.1トンで、前年(780.1トン)の1.4倍、^{*}1,020.1トンの1.0倍であった。月別では1月(279.7トン)、2月(512.7トン)、10月(120.9トン)にまとまった水揚げがあった。伊東港の総水揚量は、746.7トンで、前年(419.0トン)の1.8倍、^{*}370.4トンの2.0倍であった。月別では、2月(282.5トン)と11月(112.9トン)にまとまった水揚げがあった。

2 カタクチイワシ

平成28年における静浦漁港の総水揚量は8.1トンであった(前年1.7トン、^{*}92.4トン)。沼津港の総水揚量は72.3トンで、前年(67.5トン)の1.1倍、^{*}79.3トンの91%であった。月別では5月(65.7トン)にまとまった水揚げがあり、他の月は4月(6.2トン)と8月(0.4トン)の水揚げのみであった。伊東港の総水揚量は226.9トンで、前年(248.9トン)の91%、^{*}659.2トンの34%であった。月別では、6月(124.7トン)にまとまった水揚げがあった。

^{*} 平成：過去5カ年(平成23~27年)平均

[シラス船曳網]

平成28年シラス漁は3月21日から始まった。平成28年3月～平成29年1月の主要6港（静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居）における総水揚量は7,659トンで、前年(8,549トン)の90%、平年*(7,840トン)の98%であった。また、総水揚金額は4,598,645千円で、前年(4,605,551千円)の1.0倍、平年(4,278,113千円)の1.1倍であった。平均単価は600円/kgで、前年(539円/kg)及び平年(546円/kg)の1.1倍であった。

今漁期は、3月の解禁当初から平年及び前年を上回る漁模様で始まった。4月は前年の1.6倍、平年の1.8倍となる1,745トンの水揚があり、今漁期における最大のピークとなった。最大のピークの時期は前年は6月、平年は5月であったが、今漁期は4月であったことが特徴としてあげられる。5月に入ると水揚量は減少し、6月も低調に推移したため、両月ともに前年及び平年を下回った。7月は一時的に漁模様が回復し、水揚量は848トンで前年の27.5倍と上回り、平年の89%と同水準であった。その後、水揚量は再び減少し、8月、9月は両月ともに平年を下回ったが、前年より上回った。昨年7～9月は平年に比べて極端に悪い漁模様であったが、今漁期も8月、9月は前年より多いとは言え、平年の半分程度の水揚量に留まった。10月の水揚量は再び増加し、今漁期において二番のピークとなる1,375トンで前年の1.9倍、平年の1.4倍と上回った。11月に水揚量は減少したが、前年と同水準、平年を上回った。12月の水揚量は前年及び平年を下回ったが、1月にまとまった水揚があり、154トンで前年の1.3倍、平年の1.8倍と上回った。

シラスの魚種別の漁況は、カタクチイワシのシラスが期を通じて漁獲された。マイワシのシラス(以下、マシラス)は主に3～5月に漁獲され、水揚割合はその時期における全水揚量の18%を占めた。また、マシラスの水揚割合は1月も高く、全水揚量の87%を占めた。漁期中のマシラスの水揚割合は、親のマイワシ資源の増加により近年増加傾向にあり、10年前の平成19年漁期においては、全水揚量の1%以下であったが、今漁期は8%であった。今後もマイワシ資源は増加すると予測されているので、マシラスの水揚割合も増加すると考えられる。なお、ウルメイワシのシラスは、3～6月と12～翌年1月にわずかに混じる程度であった。

*平年：過去5カ年(平成23～27年)平均

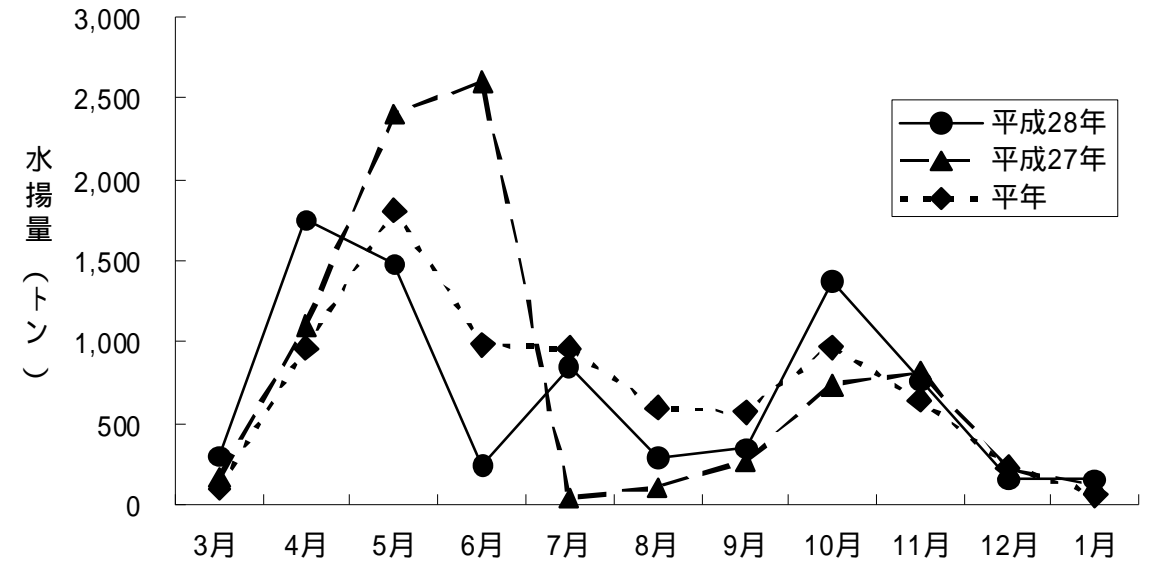


図7 平成28年 主要6港 水揚量の推移

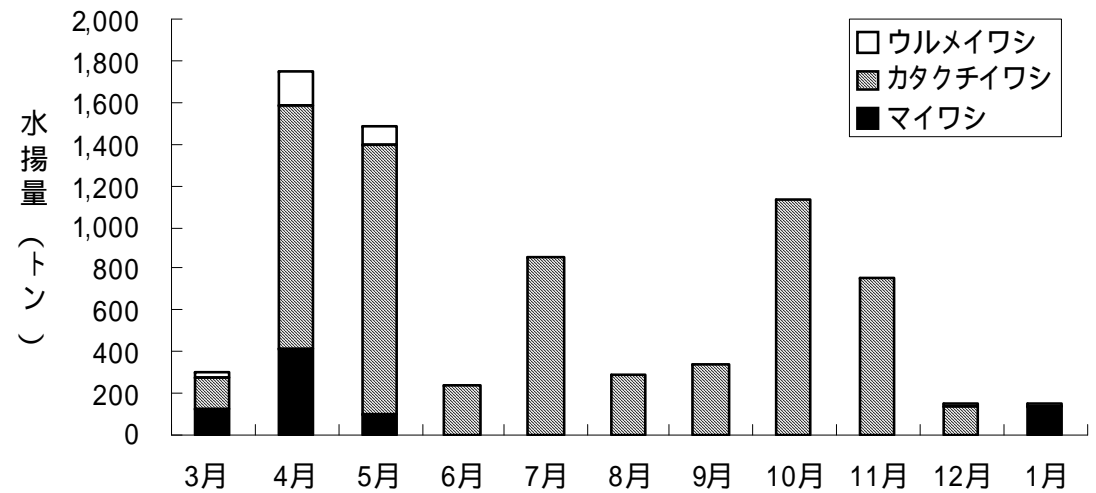


図8 平成28年 主要6港 シラスの魚種別水揚量の推移

[定置網]

平成28年の伊豆半島東岸大型定置網7か統(伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津)の漁獲量は3,379トンで、前年漁獲量4,237トンの80%、**年平均漁獲量(昭和57年～平成27年平均)4,105トンの82%**であった。月別漁獲量を見ると、上半期(1～6月)は概ね**年平均並み～年平均を上回った**が、下半期(7～12月)は期を通して**年平均を下回った**(図9)。

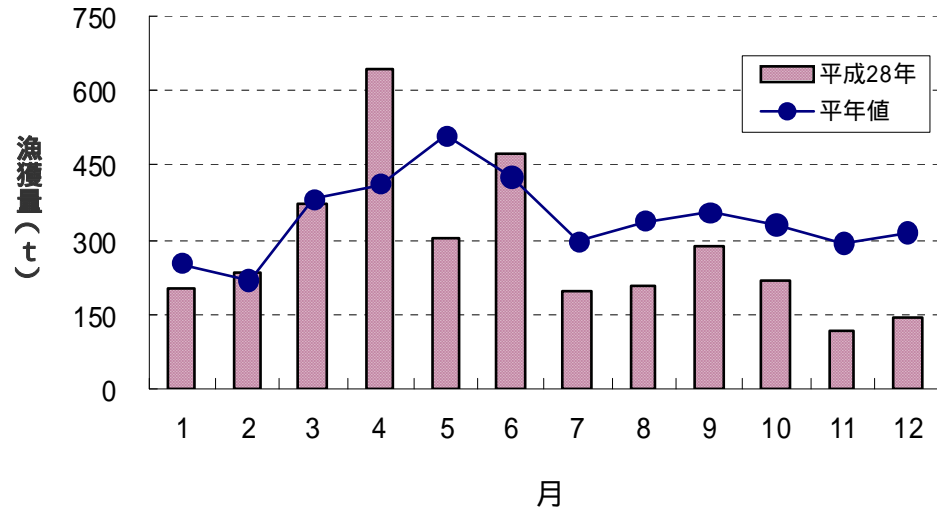


図9 月別漁獲量の推移

漁場別漁獲量は、ほぼ全ての漁場で前年を下回った(図11)。なお、漁獲の多かった漁場は、順に北川(さば類、ブリ、マイワシ主体)、川奈(さば類、ブリ、マルソウダ主体)、古網漁場(さば類、カタクチイワシ、マイワシ主体)であった。

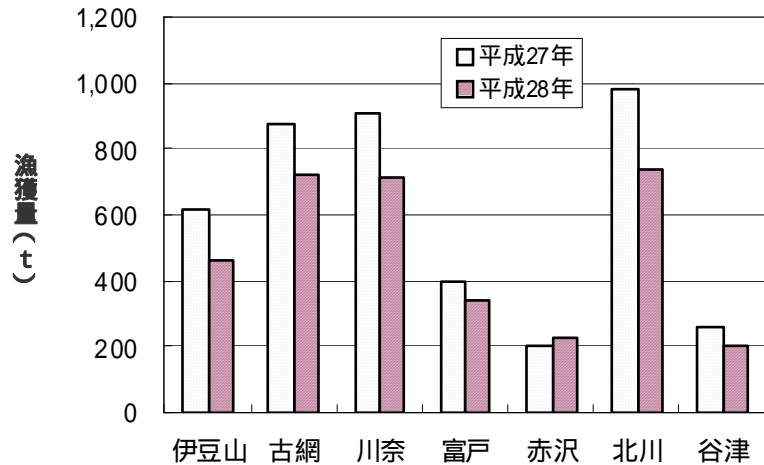


図10 漁場別漁獲量

多獲された魚種(上位10種)の漁獲量は表4のとおりで、さば類、ブリ、マルソウダ、ヤマトカマス、シイラ、アカカマスは**年平均並み～年平均を上回り**、カタクチイワシ、マイワシ、スルメイカ、マアジは**年平均を下回った**。

さば類は1,125トンで、前年比1.1倍、年平均比1.1倍と、ほぼ前年・年平均並みの漁獲であった。さば類のうち、ゴマサバは1,055トンで、前年比1.0倍、年平均比1.1倍と前年・年平均並みの漁獲であった。但し、月別漁獲量について見ると、1～4月は好調であった一方、5～12月は概ね前年・年平均を下回る低調な漁獲となった。一方、マサバについては、ゴマサバに混じる程度の70.5トンの漁獲であったが、前年比1.8倍と前年を上回った。

ブリは652トンで、前年比64%、年平均比2.7倍と、前年は下回ったものの、年平均の2倍以上の漁獲があった。主体となった銘柄別の漁獲量は、ぶり銘柄が192トンで前年比35%、年平均比2.0倍、わらさ銘柄は417トンで前年比1.1倍、年平均比4.7倍であった。

カタクチイワシは284トンで前年比63%、年平均比72%、マイワシは263トンで前年比89%、年平均比76%と、前年・年平均を下回る低調な漁獲となった。また、スルメイカは108トンで前年比36%、年平均比50%、マアジは45トンで前年比44%、年平均比9%と、前年・年平均を大きく下回る極めて低調な漁獲となった。

表4 多獲された魚種の漁獲量

魚種	漁獲量(トン)	前年比	年平均比
さば類	1,125	1.1	1.1
ブリ	652	0.6	2.7
カタクチイワシ	284	0.6	0.7
マイワシ	263	0.9	0.8
マルソウダ	230	1.3	0.9
ヤマトカマス	147	0.8	2.0
スルメイカ	108	0.4	0.5
シイラ	78	0.7	1.2
アカカマス	57	0.9	2.1
マアジ	45	0.4	0.1

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/mobile/>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星 NOAA の海面水温分布画像と 関東・東海海況速報を見ることができます。

